言語研究（*Gengo Kenkyu*）**142**: 45–76（2012）

琉球喜界島方言のアクセント
――中南部諸方言の名詞――

上　野　善　道

国立国語研究所

【要旨】琉球方言の一つで多様な方言差を持つ奄美喜界島の中南部諸方言について，その主要なアクセントタイプを 6 つ取り上げ，名詞アクセントの体系と仕組みを記述する。まず，湾方言が二型アクセントで，一系列は文節単位で決まる語声調，一系列は文節単位ながら単語単位で指定される昇り核を有するもので，語声調と核が併存している体系であること，両系列ともモーラ単位を基本としながら撥音は特別で，語声調の形は担うのに昇り核は担えず，両系列の質的違いを示していること等を述べる。無核型と語声調との関係も考察する。次に，湾方言の体系と比べつつ，坂嶺，上嘉鉄，荒木，中里，伊実久の各方言の違いを明らかにする。最後に，伊実久方言がこれらの祖体系に当たると位置付けて，上記諸方言のアクセント史を素描する *。

キーワード：二型アクセント，昇り核，言い切り形／接続形，語声調，アクセント史

1. 喜界島の概況

喜界島は，行政的には鹿児島県大島郡喜界町であり，言語的には琉球方言の北端に属する（それより北のトカラ列島方言は本土方言）。15 世紀に喜界島が琉球王国の支配下に入り，17 世紀初頭に薩摩の琉球入りによって喜界島から与論島までの奄美諸島が薩摩藩の直轄下に入った関係による。19 世紀の廃藩置県の際に奄美諸島はそのまま鹿児島県となった。薩摩方言の影響は見られるが，根幹は疑いもなく琉球方言である。戦後，奄美群島はアメリカの統治下となり 1953 年に復帰したが，英語の影響は見られない。

同じ奄美方言ではあるが，隣の奄美大島方言とは，直接通じにくいほど異なる。大島と違い，山や川がない平坦で小さな島（総面積 56.94 平方 km，周囲 48.6 km）であるが，喜界島内部の方言差は大きく，37 の集落ごとに何らかの違いがある。大きな集落では，その中の小字レベルで異なることもあると住民は言う。島内の

* 本稿は，1982 年 6 月 25 日にアジア・アフリカ言語文化研究所の音韻部会で発表した「喜界島方言の名詞のアクセント」と，2011 年 5 月 30 日に神戸大学で行なった国語研チュートリアル「喜界島方言アクセントの調査と分析」をもとに，その後の調査で補訂を加えて執筆したものである。長年に渡ってご協力いただいた話者の方々と喜界町教育委員会並びに関係者のみなさまに厚く御礼を申し上げる。査読者と『言語研究』の編集委員会からのコメントによって表現や書式を改めることができた。英文要旨は Timothy Vance 氏がチェックして下さった。それぞれに感謝の意を表する。

集落一覧を喜界町公式 HP から（1）に転載する（2012 年 7 月 28 日現在。URL は http://www.town.kikai.lg.jp/kikai01/kikai04.asp）。

（1）喜界島集落一覧

この島でも過疎化・高齢化が進んでおり，たとえば 1955 年には 16,000 人を超えていた人口が 2012 年 7 月時では 7,833 人となっている。特に子供が減っており，2012 年 4 月に小学校が 9 校から 2 校に，中学校が 3 校から 1 校に統合された（高校は 1 校のまま）。

かつては喜界島でも「方言札」に代表される方言禁止運動あり，特に学校教育において盛んに行なわれたが，それでも南琉球に比べると方言はまだ元気な方で，その生育環境などによる個人差はあるものの，50 代までは保存していると言えるようである。しかし，それ以下の世代は話せず，危機言語の一つとして記録保存が急がれている状況にある。

2. 先行研究

アクセントに事実上限定し，3 期に分けて略記する。

初期の研究は全体の見通しを得るための個別的なものであった。服部四郎ほか（1959a）は，喜界島の阿伝（あでん），花良治（けらじ），浦原（うらばる），上嘉鉄（かみかてつ），湾（わん），城久（ぐすく），仲間（なかま），伊砂（いさご），小野津（おのつ）の 9 地点を含む奄美諸島の 74 地点について 34 項目の音声を記述しており，主要な特徴の分布が概観できる。同（1959b）は阿伝の基礎語彙 235 項目に及ぶ詳細な音形記述を含む[1]。上村幸雄（1957: 115）は，文法記述の中で，阿伝の 2･3 拍語（以

[1] 喜界島調査は 1959ab 両報告とも服部四郎による。調査は 1958 年春で，このころの喜界島はまだ車がほとんどなく，歩いての調査だったようである。私の小野津方言の話者は，かつて服部の話者を務めたことのある方で，その調査終了後，道に迷わないようにと一緒に歩いて途中まで見送ったという思い出を話してくれた。また，同方言の別の話者からは，映画は中心部の湾でしか見られず，片道 2 時間かけて往復したと聞いた。島に渡るのも船だけで，小型でよく揺れたという。1979 年の私の調査のときは島内はバス，島へは飛行機も利用できた。現在とは大きく異なるこのような交通事情も方言差を生み出し，それを保持する要因の一つになっていたものと考える。なお，NHK テレビは 1963 年，民放テレビは 1976 年に受信が開始された。

下，本稿では「拍」は「モーラ」と同義）につき，湾，仲間，城久などと同じく「二型のようである」と結論だけを記す。上村（1959）は，喜界島手久津久（てくづく）方言を含む琉球方言 25 地点の 1・2 拍名詞 28 語と主格助詞付きのアクセントを示し，それを従来の本土方言の「アクセントの類」に基づいて分類している。

平山輝男ほか（1966: 167–171）は，喜界島のアクセントは小野津とそれ以外とに分かれるとする。花良治方言の「体系表」から 3 拍名詞までを（2）に引用する（4 拍語はすべて用言で，4 つの型が載っており，拍数と同じ対立数を想定か）。「反省的型」は原文のままで，○は低，●は高，◎は台頭現象（語頭が高まる現象で「音韻論的解釈では有意味でない」という），△と▲はそれぞれ助詞の低と高の印。ha:（葉）など長母音を含む語形には○●の下にスラーが付いているが，省いてまとめた。他の表記は本稿の形に適宜合わせた。

(2)	音韻論的解釈	反省的型	語例
	/○○/	○●～◎○△	ha[na（鼻），葉，木
	/○]○/	●○～●●▲	[ku]i（声）
	/○○○/	◎○●～◎○○△	['a]ku[bi（あくび）
	/○○]○/	○●○～○●●▲	'u[sa]ngi（兎）
	/○]○○ /	●○○～●●●▲	[Fuk]ku（袋）

面白いところをある程度捉えていながらその解釈に問題があり，体系はまだ見えない。

服部四郎（1959 [1958]）は奄美諸方言の分布と歴史を扱い，後の松森晶子の「系列別語彙」の先鞭をなす分類（3）を 2 拍名詞まで行なった（横の数字は本土方言の「類」に相当）。

(3)　A：鼻 1，飴 1，風 1，橋 2，石 2，音 2，…
　　B：花 3，島 3，鑿 4，汗 5，雨 5，亀 5，…
　　C：甕 3，蚤 3，舟 4，箸 4，声 5，桶 5，…
　　a：毛，葉，血，瀬，…
　　b：木，歯，乳，巣，…

喜界島は，小野津は A/BC，a/b であるのに対して，阿伝，花良治，浦原は AB/C で，a と b は区別しないとする。共時的なアクセント体系への言及はないが，類似する上代語の母音体系の解釈を含め，アクセント史・音韻史にとって重要な仮説を多く提示している。

その他，服部や上村等の資料に基づいて琉球諸方言 1・2 拍名詞アクセントの史的考察をした金田一春彦（1975 [1960]）もある。以上を初期とする。

この状況を受けて奄美全域の調査をすることにした上野善道は，1979 年と 80 年に喜界島の事実上全集落を回り，1 ～ 5 拍名詞約 400 語，動詞・形容詞の終止形約 300 語を調べた。その結果は 1982 年に口頭発表し，他の論文の中で断片的に言

及した（上野 1984a, 1984b, 1991 等）。体言編（上野 1993），用言編（上野・西岡敏 1994）がその資料集である。その後も随時調査を続け，基本活用形の資料も発表した（上野 1995b, 1997, 2003a）。ややまとまった形で書いた論として Uwano（1999, 2003b），上野（2000）等がある。形態素の融合により第三のアクセントをもつに至っている動詞継続相も扱った（上野・西岡 1995a）。その途中で出た，小野津と阿伝の両方言を記述した﨑村弘文（1985）に対する私見も述べ（上野 2002b），湾と小野津の付属語アクセントも取り扱った（上野 2002a）。

その間に，上野（1991）の中里（なかざと）方言解釈に対する別の枠組みからの代案（11.5 節も参照）を中心に，坂嶺（さかみね），上嘉鉄，阿伝，志戸桶（しとおけ），小野津方言を扱った松森晶子（1991）も出た。

以上が中期で，資料も集まり，かなりの見通しが立った時期である。

その後は空白期間が続いたが，2010 年に国立国語研究所（国語研）が喜界島の 10 集落で総合的な共同調査研究（班長木部暢子，アクセント調査表の担当者は松森）を実施したことが大きな刺激となって研究が活性化した。松森（2011a）に引き続き，各調査地点の報告資料とともに窪薗晴夫（2011）と松森（2011b）の論を含む木部ほか（2011）も出た。上野もその一員として久し振りに喜界島の地を踏んだのがきっかけで調査を再開した。今回はその結果を中心に報告する。この共同調査に参加した若手の研究者が活発に調査研究を続けていることも付け加えておかなければならない。白田理人ほか（2011）もその一つである。

国語研の共同調査研究は，講演会や町の広報紙へのリレー執筆などを通して地元への還元と啓蒙を図っており，地元民の意識も変わりつつあるようである。これまでの個人レベルでの研究ではほとんど見られなかった成果である。しかし，これで方言が再活性化すると考えるのはあまりにも楽観的過ぎる。記録保存だけでも研究者のなすべき課題は多い。

3. 分節音および表記法

分節音（語音）についてごく簡単に触れる（具体例は上野 1993 等にある。他に，服部 1959［1958］や木部 2011 も参照）。

子音は喉頭（緊張）化音（無気音）/P, T, C, K/が非喉頭化音（有気音）/p, t, (c,) k/と対立する。/P/ の該当音声は[p’], /C/は[ts’]で表記する。ただし放出音ではない（それぞれ[pˀ], [ˀp], また[tsˀ], [ˀts], [tz]とも表わされる）。対する有気音は[pʰ]などであるが，問題としないかぎり気音表示は略す。語中は一般に喉頭化音が出る。[tʰat’ami]（畳）の 2 つのタは違い，2 番目のタは[t’ana:]（間＜ふたなか，二中）の/Ta/と同一だと話者は認識する。一方で，語中の非喉頭化音は，形態素の切れ目を表示する機能を担っている。[ʃimat͡ʰo:hu]（島豆腐），[makk’ak͡ʰaba:]（枕カバー）など。従って，/tatami/とする通説は取らず，語中の喉頭化音はそのまま音素と認めて/taTami/と解釈する。これと類似の分布と機能は，琉球方言南端の与那国島方言にも見られる。

鼻濁音（ガ行鼻音）[ŋ]が非語頭の位置に現れて[g]と区別される。[huŋa:]（卵），

[wunaŋu]（女＜オナゴ），[hassaŋi:]（髪の毛＜かしら毛）など。主格助詞も[ŋa]である。ただし，元の[ŋi]は[ɲi]に変化している。[k'uɲi]（釘）など。鼻濁音は，琉球方言では他にやはり与那国島に分布しているだけである[2]。鼻濁音と対立する[g]は，[migi]（右。[ɲiɲi:]が古），[kagami]（鏡。[haŋami]が古），[tamagu]（卵。Cf. [huŋa:]）などの借用語・新形か，[nɪgut'u]（寝言），[mutʃ'igumi]（もち米），[ʔaburagami]（油紙），[mizugusuri]（水薬）など，後部要素が 2 モーラ以上に対応する連濁形に現れる。興味深いのは，標準語における鼻濁音の位置づけとは異なり，喜界島の話者達は[ŋ]を地域訛りと意識していることである。テレビでは[g]で言っているということからの判断のようである。

標準語でハ行子音が現れる語形に対応して，集落により[p]が出る。[pana]（鼻）など。ただし，閉鎖・破裂が弱く，[ɸ]と連続的である。一方，外来語には/P/ が出る。[p'aN]（パン）など。パ行の仮名は，この（[p]〜[ɸ]とは区別された）/P/ を表わすものと認識していると見られる。

声門閉鎖音/'/[ʔ]の有無による対立が有る。[ʔiŋŋa:]（犬）と[(j)iŋŋa]（男），[ʔut'u]（音）と[(w)ut'u]（夫）など（「夫」は[ʔut'u]や[gut'u]の地域もある）。

母音は，/i, e, a, o, u/があり，他に北側の小野津，志戸桶，佐手久（さでく）では中舌寄りの/I, E/[ɪ, ɛ̠]もある。基本は/i, a, u/で，/e, o, E/は長音節ないし撥音節という重音節中に出るのが普通である。かつ単独の名詞形では稀で，これらが規則的に出るのは名詞末尾音/i, u, I/に助詞 ja（は）が融合した形においてである。その規則を（4）に示す。長母音にはそのまま ja が付く。

（4）　名詞末尾音＋ ja の融合規則
habi（紙）+ ja →habe:（紙は），maTu（松）+ ja →maTo:, hana（花）+ ja →hana:,
nabI（鍋）+ ja →nabE:, PaN（パン）+ ja →Pano:, saTa:（砂糖）+ ja →saTa:ja

阿伝や川嶺（かわみね）などでは鼻母音が現れる。[hassaĩ:]（髪の毛），[ʔiĩ]（稲）などで，主に[-ɲi]（＜ ŋi と，i の後の ni が合流）に由来する[3]が，[huw̃ã:]（卵）などもある。荒木方言では用言の終止用法に現れる。[tʃ'its'uĩ]（聞く），[tʃ'itʃ'uĩ]（聞いている），[tʃ'itʃ'ibusaĩ]（聞きたい）など（連体形は[tʃ'its'uN]など。また，[tubiN]（飛ぶ），[ʔamiN]（編む）など，語幹が -i で終わる場合は終止形でも N が出る）。

音節構造は CV が基本で，CVV（長音節），CVN（撥音節），CVQ（促音節）がある。超重音節が現れるのは外来語においてである。

本稿でこれらを表記するに際しては，長年にわたり奄美諸方言（あるいは琉球諸

[2] ごく最近，宮古島の一部にもあることが報告された（ローレンス 2012）。ただし，由来は全く異なる。接尾辞における -gam- > -ŋ-（例：指小辞の -gama > -ŋa）の変化による。
[3] 次の世代では鼻音化が失われている。「釘」が[k'uŋi] > [k'uɲi] > [k'uĩ] > [k'ui]となって「杭」と同音になり，「釘」と「杭」が（同音異義語ではなく）同一語だと把握している話者に会ったことがある。物の形もよく似ているし，「〜を打つ」という用法も共通していることからそう認識されたものであろう。音変化によって多義語が生まれたケースに当たる。

方言）に用いてきたものをそのまま利用する。音韻表記を考慮した簡略音声表記で，キーボードだけで入力できることの便利さと，一連の資料集との繋がりを重視してのことである。

言及済みのもの以外で注意すべきは以下の通り。子音の口蓋化（明瞭で対立のありうるもの）にはjを当て，sji（シ），nji（ニ）としてsi（スィ），ni（ヌィ）と区別する。チ（とタ行拗音）およびツにはCを当ててCji，Cuとする。鼻濁音はngで示す。[ɸ]はFとする。長音は：，撥音は環境による変種を問わずNとし，促音は後続子音を繰り返す（喉頭化音の前でも小文字にする）。既出であるが，’は声門閉鎖音を表わすことに注意。

音調記号は（5）を用いる（言い切り形は「。」，接続形は「…」ともするが同じ内容）。

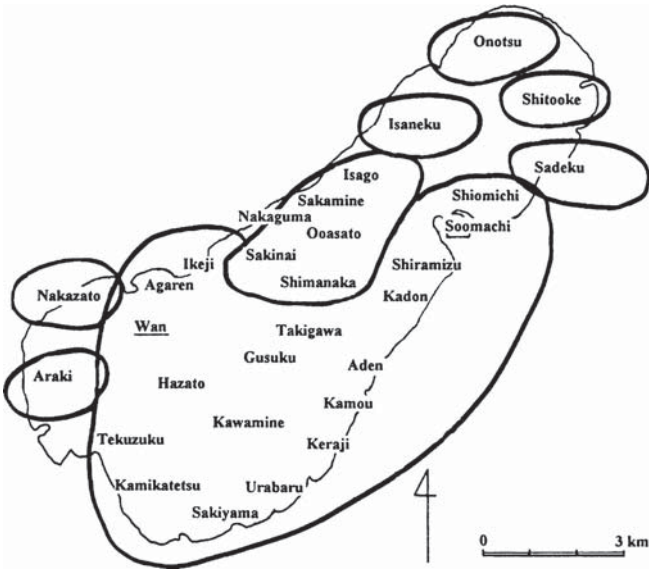
（5）　[○　拍間の上昇（上げ）（従来の拙論の「と同じ）
　　○]　拍間の下降（下げ）（従来の拙論の」ないし┐と同じ）
　　[[○　拍内の上昇調（以下，「上昇調」はこの意。従来の拙論の『と同じ）
　　○]]　拍内の下降調（以下，「下降調」はこの意。従来の拙論の』と同じ）
　　○!　半下降（通常の下降]と区別される，それより小さい下降）
　　○.　言い切り形（続けずに言い切る時の音調）
　　○…　接続形（次に言葉が続く時，また，次に続ける態勢で発音した時の音調）

4. アクセント分布の概況

喜界島内のアクセントは，大きく8種類に分けられる。1982年に口頭発表した内容に基づいて作成した地図をUwano（2003b）から引いておく。

これをさらに大きく括ると，小野津，志戸桶，佐手久の「北部方言」と，それ以外の「中南部方言」とに分けられる。一方，中南部方言で最も分布が広いタイプについては，助詞の「から，まで」の振る舞いを考慮すると，内部がさらに二分されて9種類となる（第7節，第8節参照）。本稿はその全体を扱う余裕がなく，中南部方言に限定し，かつ，その中の名詞を中心に取り上げる。その他については機会を改める。

（6）アクセント分布図



5. 湾方言

5.1. アクセント体系

役場などのある中心地[4]の湾方言（wa[N]）から始める。話者は故大山哲夫氏（大正 13 ＝ 1924 年生まれ）。このタイプが最も広い分布を示し，他の方言を理解する上でも役立つ。

名詞の型の一覧を（7）に示す。アクセント単位が長くなっても 2 種類の対立しかない「二型アクセント」である。両系列を α／β と名付ける（その音調型を問題にするときは α 型，β 型と呼び，「系列」と「型」は事実上同義にも用いられる）。ただし，1 拍語は α 系列の 1 種類のみである（2 拍語に由来するもので，詳しくは上野 2000: 52 注 1 参照）。β 系列のみ，言い切り（.）と接続（...）の区別があり，「鍋。」と言い切るか，「鍋洗った」（目的格は助詞なし）のように後に続けて発音するかによって区別が現れる。続けるつもりで「鍋 ...」と言い淀んでやめても接続形が出る。後に示すように，助詞付き形にもこの区別があり，言い切りと接続の別は，単語単独か助詞付きかとは別の基準である。α 系列にはその区別がなく，どちらの態勢で言っても同じになる（これは無印とする）。なお，「刀」に対応する haTana は，一般に料理の包丁をさす。

[4] ただし，中心地の方言が威信を持っているわけではなく，すべてが平等で対等の関係にある。各集落がアイデンティティーをもち，それぞれの方言の独自性を保持している。複数の集落から同じ小学校に通っていても，相互の方言の違いは違いとして認め，同化し合うことがなかったようである。「家で隣の集落の言葉を使うと，おまえはどこの人間か，と親に叱られる」という喜界島の話を服部四郎の授業で聞いた。同じ体験をしたという話者に私も会った。

(7)					
α:	[Ka	mi[du	[ta]Ta[mi	[midu]Ku[mi	[taKara]mu[N
	(子)	(水)	(畳)	(水汲み)	(宝物)
β:	---	[na]bi.	ha[Ta]na.	[mu]Cji[gu]mi	[sa:]ba[sji]ra.
	<欠>	(鍋)	(刀，包丁)	(もち米)	(茶柱)
		[nabi…	ha[Tana…	[mu]Cji[gumi…	[sa:]ba[sjira...

所属語彙は簡単に触れるしかないが，標準語 1 拍名詞に対応する単語は母音が長く 2 モーラで，すべて α 系列の mi[du と同じになる。Cji[:（血），ha[:（葉），ki[:（木），ti[:（手）など[5]。ただし，長母音をもつ形がすべて α 系列というわけではなく，[wi:（桶），[na:（中）などの β 系列もある。CVCV の 2 拍語 β 系列に由来するものである。詳しくは上野（1993）を参照。

これらの名詞に助詞（連続）を付けた音調型を（8）に示す。

(8)	名詞	が	から	からも
α:	[Ka	Ka[nga	[Ka]Ka[ra	[KaKa]ra[mu
	mi[du	[mi]du[nga	[midu]Ka[ra	[miduKa]ra[mu
	[ta]Ta[mi	[taTa]mi[nga	[taTami]Ka[ra	[taTamiKa]ra[mu
	[midu]Ku[mi	[miduKu]mi[nga	[miduKumi]Ka[ra	[miduKumiKa]ra[mu
β:	[na]bi.	[nabi]nga.	[nabiKa]ra.	[nabiKara]mu.
	[nabi…	[nabinga…	[nabiKara...	[nabiKaramu...
	ha[Ta]na.	ha[Tana]nga.	ha[TanaKa]ra.	ha[TanaKara]mu.
	ha[Tana…	ha[Tananga…	ha[TanaKara…	ha[TanaKaramu…
	[mu]Cji[gu]mi.	[mu]Cji[gumi]nga.	[mu]Cji[gumiKa]ra.	[mu]Cji[gumiKara]mu.
	[mu]Cji[gumi…	[mu]Cji[guminga…	[mu]Cji[gumiKara…	[mu]Cji[gumiKaramu…

α 系列は単語レベルでも文節レベルでも同じで，単語は裸の文節でもあるので，「文節がアクセント単位になり，その次末拍のみが低まる」と記述される。それに対して β 系列は単語レベルでの指定が必要で，「単語の次末拍（－②）に昇り核（/[/）がある」と解釈する。昇り核のある拍で高くなり，その後は，接続形ではそのまま「文節」の最後まで高く続くのに対して，言い切り形では文節末拍で下がる。最後が下がるかどうかで機能の違いが表わされる。言い切り形と接続形の区別があるのは，昇り核の典型的な現れである[6]。昇り核の前に拍があればそこは下がり，さらに

[5] 窪薗（2011: 57）は，これらがなぜすべて α 系列の方に統合されるのか不明とするが，通時的な理由による。これらは母音が長く発音されており，「血」は「水」と，「葉」は「音」と，「木，手」は「山」とそれぞれ同じ型を持っていた。「水，音，山」が α 系列に合流している方言では，「血，葉，木，手」も α 系列に合流するのが当然である。なお，「酒」，「川」も，「水」，「音」と同じなので，それぞれ長母音の se[:, ha[: という形に変化しても同じように α 型になる。一方，すぐに後述する「桶」，「中」は，「鍋」，「舟」と同じ β 系列なので，長母音になっても β 型を保持している。1 拍名詞に対応する琉球方言の母音が長かったことは，金田一春彦（1975 [1960]: 143–145）に指摘がある。

[6] 青森県弘前市方言も，昇り核で高くなった後，文節末拍が下がるか否かで言い切り形／接続

その前に拍があればすべて上がる。つまり，「核位置を基点にしてその直前の拍のみが低まる」とまとめられる。β系列との対比上, α系列は無核型と認められる（さらに5.3節も参照）。

補足すると，β系列の単語に固有なのは上昇([)であり，下降(])は単語に固有の属性ではない。昇り核で義務的に上昇した後，文節末モーラが下降することにより後に続けるつもりのないことが示される。それのないのが接続形である。すなわち，湾方言における下降は単語が本来もっている属性ではなく，β系列の単語を含む文節が置かれている環境，具体的には「句末」を示す広義のイントネーション特徴である。（東京方言では，上昇が「句頭」を示す特徴であり，下降が単語の属性としての下げ核であることと比較。）

文節単位の無核型であるα系列では[KaKa]ra[mu = [midu]Ka[ra = [taTa]mi[nga = [midu]Ku[mi のように系列化[7]が成り立つのに対して, β系列は単語の末尾から指定する位置（次末拍）に核があるため, [nabiKa]ra. ≠ ha[Tana]nga. ≠ [mu]Cji[gu]mi. となって系列化は成り立たない。

以上の解釈は, 1982年の研究会で発表した後, 上野（1984a）で最初に活字になり，その後，何度か取り上げてきた。ただし，系列化不成立の要因として，核が単語レベルで決まる他に，「語末から数える位置指定」も関わることは上野（2012a）で付け加えた。

5.2. α系列とβ系列の異同

この湾方言の解釈は，国語研の調査により30年後に取り上げられることになった。窪薗晴夫(2011)である。話者は違うが,（調査表に該当語彙が含まれていなかったために）1拍語の形を記録していない以外，そこに取り上げられたデータは一致している。解釈の面でも，α系列が文節単位，β系列の基本が単語単位とするのも同じである。窪薗はα系列を「語声調」（早田輝洋 1999）と認定しているが，これについては5.3節で取り上げる。

窪薗は，β系列の核の前に2拍以上ある場合にHの無い形は話者に容認されない（HLHL. をLLHL. とするのは不可）ことを根拠にこれらのHも単語の特徴であるとし，自律分節理論の立場から「HLHの音調メロディー」を設定してα系列との共通性を統一的に扱っている。α系列はHLHを文節末から順に左に付与し，β系列では語末から，しかも語末拍を除いて（音韻的に不可視扱いして）HLHを付与する，という分析である。両系列とも音調メロティーは同じHLHで，その最後のHと結びつける位置が違うだけ（それも不可視性により，見える範囲の右端で統一）とする点が窪薗の分析のポイントである。

形を区別する。上野（1977: 297–301）を参照（核の名称や規定は, 今は考えが変わっているが）。

[7] これらのN型アクセントに関する概念や用語については上野（1984a, 2012a）を参照。また，上野（2012a）には，今回扱わなかった湾方言の活用形のアクセントなども取り上げている。

まず，その前提となっている核の前の高まりであるが，私見との間にその事実認定に関する相違は全くない。一貫して HLHL. などを記録しており，文節を連ねてもその高まりに変化は見られないので，（東京方言のような音調句の特徴ではなく）「単語の特徴」だと私も見ている。ただ,「非弁別特徴」と見て取り立てて表示せず，文章表現で済ませてきたものである。

関連して補足すると, 私の核は「動的」かつ「局所的」なものである。動的とは，L や H の静的な段階（レベル）を前提にせず，それに先立つ音調の流れを受けて，そのどんな高さのところからでも下げる，昇る，上げるなどの動きをする意である。局所的というのは，音調変動の前後に一定の長さを前提とせず，その局所で瞬時に起こればよいという意味である。そのため，下げ核を HL とは見ないし，その H の前も H が連続するとは考えていない。昇り核も LH ではないし，指定をしない限りその L の前はすべて L である，とも見ていない。現実の湾方言の核は 1 拍分の低を伴って次の拍で昇っているが，さらにその前の部分に関しては様々な可能性があり，それは方言ごとに決まっている非弁別的なものと捉えてきた。

しかし，([非[弁別特徴]] ではなくて)[[非弁別]特徴]で，これも「特徴」と位置付けていても,「非弁別特徴」という名称は確かに消極的に響く。そこで, これを「形状特徴」と呼び改めて，より積極的に示すことにしたい。既存の名称だが，ここでは，アクセント単位のうちで，核の局所的な動きとは直接関わらない部分の形状をさす。

こうすると,「形状特徴＋昇り核＋接続の有無（句末の広義のイントネーション）」が β 系列の音調型を構成し，無核型としてきた α 系列はその音調型の「全体」がそのまま形状特徴となる [8]。

このように私は両系列を分けて捉えているが，それは，一見共通しているように見える「HLH」の「-LH」の部分に，実は α 系列と β 系列で違いがあると考えるからである。私見では，最後の上昇が形状として与えられているのか（α），核の反映なのか（β）の差が上昇の後の動きの差（α：そこ止まりで動きと無関係，β：言い切り／接続の違いがある）となって出ているのみならず，「担い手」に関わる違いもある。(9) の撥音（N）の振る舞いに注目されたい。

[8] β 系列の「句末の広義のイントネーション」としたのは，後に続けるときにのみ出る音調で，核の拍の後が文節末拍まですべて高くなる。対する α 系列は，接続の有無と無関係でかつ文節末拍のみが高くなるので，ともに文節末拍が高く終わっても同じイントネーションとは考えない。むしろ，α 系列は全体の形がそのまま形状特徴である方が，後述の語声調にふさわしい。（強いて分けるなら，文節末の上昇と，その前の上昇・下降とに二分する。これには後者の成立が新しいという通時的な根拠がある。11 節を参照。）なお，9 節に後出の中里方言接続形における両系列の平行性は，α 系列は文節末拍，β 系列は（文節末拍ではなく）昇り核のある拍を基点に，それより前の拍との間において認められるもので，その関係が上記とは異なる。

(9)　α:　[ha]Tu[:（鳩）, [haTu]:[nga（～が）；
[ku]N[Ka（九日）, [kuN]Ka[nga；[taKara]mu[N（宝物）, [taKaramu]N[nga；
mus[su（蓆）, [mus]su[nga；[ha]ras[sa（裸足）, [haras]sa[nga
β:　[Ka]:[ngi]:.（桑木）, ho[:]zji.（麹）；
['i]N[nga]:.（犬）, [KuN]zja.（鯨）, [PoN]Pu.（ポンプ）；
but[To]:.（棒）, 'u[Fuc]Cju.（大人）, [huk]Ku.（袋）

撥音は，α系列では長音の[ha]Tu[:（鳩）と同様, [taKara]mu[N（宝物）のように末尾において単独で上昇を担うことができるのに対して，β系列では，長音はho[:]zji.（麹）のように単独で上昇を担えるものの, 撥音は単独ではそれができず, [KuN]zja.（鯨）, [PoN]Pu.（ポンプ）となってそれを含む音節主音に核がずれる（－③型）のである[9]。より長い単語でも[saTa]:[KuN]ma.（砂糖黍搾り装置＜砂糖車）などがあり，次末拍のNだけが高くなる例は得られていない。その形状特徴も－③型に合わせたものとなっている。（なお，促音節/CVQ/はどちらの系列においても常に一体で行動し，その中で上昇や下降を示すことはない。促音で終わる単語はそもそも存在しない。）

このことは, α系列の形状の末尾上昇がその担い手の語音属性を問わず一律に「鋳型」として被さるものであるのに対して，β系列は核による上昇であり，「撥音Nは核を担う資格がない」という語音制限があることを意味する。（α系列がモーラ単位, β系列が音節単位というわけではない。β系列でも長音節は割れて振る舞う。）

以上のことから，HLHの末尾の-LHの部分に私は両系列の質的違い（片や語声調の一部, 片や核）を認めている。また, 手法の問題になるが, この質的違いもあってβ系列に不可視性を適用して右端に統一することはせず，核の位置を直接参照する立場を取る。

前半のHL-に関しては事実上同じで，私見は「それぞれの基点（α：文節末拍, β:核のある拍）の直前の拍のみを下げる」とするが,「その直前の拍のみを下げる」の部分が窪薗のHL-と共通する。なお，HL-に相当する音調型の成立過程については11.6節を参照。

5.3. 無核型と語声調

このα系列の「鋳型」としての性質（川上蓁2000の言う「形性（かたちせい）」）に着目すれば, そしてその形が「文節」で決まることを考えれば, 窪薗も言うように, これは「語声調」にふさわしい。上野（2007）は，提唱者の早田輝洋（1999）とは異なり，東京方言の無核型も一種の語声調と見たが，湾方言のα系列は一層語声調の性質を持つ。

ここで無核型と語声調の関係をあらためて考えてみるに,「語声調」は「アクセ

[9] Ku[N]zja.，Po[N]Pu.という音調型は，湾に限らず，喜界島のどの集落からも得られていない（上野1993: 144, 151)。促音が核を担えない方言は普通だが，撥音も核を担えない（しかし長音は担える）という方言は珍しい。

ント（核）」をもたない以上，必ず「無核型」である[10]。しかし，その逆は単純ではなく，無核型の中に“語声調らしさ”の度合いがあると考える。それを東京方言，岩手県雫石方言，韓国語慶尚道方言を例に示したい。韓国語は解釈が分かれるが，いわゆる HH(L-) 型を無核型と見る私の解釈（上野 1984a: 190）を前提に話を進める。

各方言の無核名詞を例に，助詞の付き方とその無核名詞を前部要素にもつ複合語を見てみると，東京方言では（10）のように核が随時出る。「魚」は単語レベルでの無核型である。

（10）　サカナ=, サカナニ=, サカナカラ=, サカナマ]デ, サカナニ]モ, サカナカラ]モ；サカナズキ =，サカナ]ツリ，サカナマ]ツリ（= は無核の印，]は下げ核）

雫石方言は，（11）のようにほとんど無核型になる。無核性がより文節にまで及んでいる。

（11）　サカナ=, サカナニ=, サカナカラ=, サカナマデ=, サカナニモ=, サカナカラモ=；サカナズキ=, サカナツリ=, サカナマツリ=。ただし, サカナ[ヨリ。([は昇り核）

韓国語慶尚道方言の[○○](○-) 型は, およそそれが 1 アクセント単位である限り，すべてを飲み込んで[○○](○-) 型にしてしまう強い力をもつ。

（12）　[muji]gae（虹）, [muji]gaega（虹が）, [muji]gaeboda（虹より）, [muji]gaekkaji（虹まで）; [muji]gaesaek（虹色）, [muji]gaedari（虹橋）

ここから，東京方言＜雫石方言＜韓国語慶尚道方言の順に，その無核型は語声調的な性質をより強く帯びると言うことができる[11]。

このように考えると，湾方言の α 系列は，ほとんどすべての助詞が同じパターンを取る点（次節も参照）で東京方言よりは雫石方言に近い[12]。結論として，湾方言は語声調とアクセント核が併存している体系と認定する[13]。

---

[10] ただし，ここは私の解する「無核型」についての論であって，早田輝洋とはそもそも前提が違っているのかもしれない。無核型とは，名前のとおり，核の存在を前提にしてそれのない型ということになるが, 語声調とアクセント（核）は水と油の関係とする早田にとっては，語声調とは「核がない」のではなく,「核とはそもそも無縁の存在」で，あくまでも語声調の中で他と対立のあるものを差すものである可能性がある。（逆に，仮に β 系列をアクセントと認めるとすれば，α 系列は無核型と言うことになるであろう。）

[11] 韓国語の場合，その音調型が他の有核型とあまりにも違い過ぎ，また明らかな下降も持っているためにこれを「無核型」と呼ぶことに違和感を持つ人もいるようである。しかし,「語声調」ないし「語声調としての無核型」と言えば抵抗は少なくなろう。私が川上（2000）の説に従ったのは，弘前方言など，無核型が有核型とは基本パターンを異にしている方言の扱いにそれが適していたからであった。弘前方言の方がこの点で雫石方言よりもより語声調的である。

[12] もっとも，複合アクセント法則が成り立たない点は雫石方言と異なる（5.5 節を参照）。

[13] ここに言う「語声調とアクセントの併存」とは,（ある語彙が語声調とアクセントの指定を共に持つ京都方言のような体系ではなく,）ある言語の同じ文法カテゴリー内に，語声調だけを持つ語彙と，アクセントだけを持つ語彙が存在する体系をさして私が呼んだものである。

5.4. 助詞類

湾方言の助詞類の振る舞いを見ておこう。

まず，圧倒的多数を占めるタイプを（13）に示す。これらはすべて自らのアクセントをもたず，名詞に接合した文節が一つのアクセント単位になり，その名詞のアクセント上の性質（α/β）に従う。その組み合わせの内部構造も問題にならない。東京方言の（10）と比較するとその違いが分かる。

（13）　nga（が），nji（に），mu（も），nu（の），du（ぞ），Tu（と，並列），zji（で，手段）；Kara（から），madi（まで），dimu/zjimu（でも。/ は併用で dimu，zjimu の両形がある印。以下同様），de:/zje:（では），njimu（にも），nje:（には），juri（より），kusa（こそ），sjiKa（しか），NCja（など），sje:/sai（さえ），To:（とは）；Karamu（からも），Kara:（からは），madimu（までも），made:（までは）

これが N 型アクセントに最も広く見られる現象であるが，N 型の中にも「独立する付属語」が一部存在する。その直前でアクセント単位が切れるのである。湾方言では，限定の「ばかり」とそれを含む助詞連続，および終助詞の類いがそれに属する。（14）に「ばかり」と，終助詞の中から質問の終助詞 na[14] の例を示す。｜はアクセント単位の切れ目で，ここでそれまでの音調はリセットされ，次から新たにアクセント単位が始まる。[ta]Ta[mi| na，ha[Tana| na の終助詞 na は無印であるが，後者の語頭の ha と同じく低く始まる。

（14）　α:　[ta]Ta[mi| be[:]ri（畳ばかり）　Cf. [ta]Ta[mi
　　β:　ha[Tana| be[:]ri（刀ばかり）　Cf. ha[Ta]na., ha[Tana...
　　α:　[ta]Ta[mi| na（畳か？）
　　β:　ha[Tana| na（刀か？）

その意味の併存を認めない早田とは独立に，ここは私自身の考え方を述べた。（ちなみに，韓国語慶尚道方言も語声調とアクセント（核）との併存体系と見る。）

可能性として考えられる早田の見解は湾方言のβ系列も語声調と見るもので，基底形から派生の途中で単語単位でアクセントに準ずるものが付与されるとするか，アクセントのように見えても，その位置が固定していて他と位置の対立がない以上，アクセントではないとするであろう。

それに対して私は，二型ゆえに位置の対立はないものの，α系列と異なりβ系列は単語レベルで「位置」が決まっており，それを基点にその後の言い切り・接続の動きも，その前の形状特徴も決まるという「核」としての振る舞いを重視する。そして，（本稿の対象外ではあるが）用言は三型アクセント（上野 2012a など）で，γ系列と（撥音における変異形以上にはっきりとした）「位置の対立」をもつことも考慮すると，β系列は語声調でないという結論になる。

[14] 窪薗（2011: 60）は，湾・中里方言において（実際のデータは中里方言），終助詞の「な（あ）」――ここの表記は原文のまま――が独立せずに先行要素と同じ文節に入るとする。しかし，私の調査では，その終助詞自身の音調は種々であるが，喜界島のどの方言でも前の自立語から独立している（自立語は接続形を取る）。中里方言では，[mi!duna]]（水か？ α），['umina]]（海か？ β），[mina!Tuna]]（港か？ α），[ha!Te:na]]（畑か？ β）等（｜は省いた）で，名詞接続形（9節参照）の終わりの高さをそのまま受けて na が下降調を取り，母音が半長になる。

たとえば na が，接合タイプから予想される[taTa]mi[na や ha[Tanana とはなっていないことに注意。名詞は接続形を取っている。これにより，別のアクセント単位として独立していながら，同時に付属語への繋がりも示されている。

「ばかり」は，自立語と同じくそれ自身の核をもつ/be[eri/である（/beQ[Kari/の形もある）。na や Ka（疑問），do:（だ，指定）などは，アクセント的にその前で切れることは確かであるが，語形が短く，その後に結びつく要素もないので，低く付く以上の属性までは明らかでない。

限定・取り立て・強意の助詞，および終助詞の類が独立する例は N 型アクセントの諸処で見つかっているが，N 型アクセントにとって例外的な「支配型」の助詞が湾方言にある。(15) のように，名詞の型を問わずすべて/-gu[ree/に変える gure:（ぐらい），およびそれを含む助詞連続の/-gu[reeja/（ぐらいは），/-gu[reemu/（ぐらいも）などがそれである。「ぐらい」が付くと α/β の区別がなくなり，それが付いた文節全体が β 型になる。

(15)　α:　[taTami]gu[re]:.（畳ぐらい）　Cf. [ta]Ta[mi
　　β:　[haTana]gu[re]:.（刀ぐらい）　Cf. ha[Tana.，ha[Tana…

5.5. 複合名詞

鹿児島方言などの二型アクセントには「複合アクセント法則」の名で知られる有名な規則がある。複合語のアクセントはその前部要素のアクセントを引き継ぐというもので，X + Y = Z の式で書けば，前部要素 X が A であれば複合語全体 Z も A，X が B ならば Z も B で，後部要素 Y の A/B は関与しない。これは非常に規則的で，複合語 Z の A/B からその前部要素 X の A/B も分かる関係になっている。

しかし，同じく二型アクセントではあるが，湾方言ではこの規則が当てはまらない。上野（1995b）の資料でもそれが分かるが，そのときの複合名詞は調査語彙に若干の偏りがあった。湾方言での再調査ができていないので，湾とほとんど差のない池治（いけじ）（'i[Cji]zji）方言の例を（16）に出す。話者は玉 謙一郎氏（昭和 7 = 1932 年生まれ）。

(16)	前部要素	後部要素	複合語
	hu[di（筆 α）	ha[Ku（箱 α）	[hu]di[ba]Ku（β）
	[ta]Ka[ra（宝 α）		[taKa]ra[ba]Ku（β）
	[ha]i（針 β）		[ha]i[ba]Ku（β）
	'u[ru]sji（漆 β）		['uru]sji[ba]Ku（β）
	'u[nji（砂糖黍＜荻 α）	ha[Te]:（畑 β）	['unji]ba[Te]:（β）
	mu[nji（麦 α）		[munji]ba[Te]:（β）
	[ha]N[su]:（さつま芋＜甘藷 β）		[haNsu:]ba[Te]:（β）

「ゴミ／球／実（α）」＋「拾い（α）」が α 型になるような例も一部あるが，全体

として前部要素の型を問わず複合語はβ型になるものが多数を占める。複合アクセント法則の不成立は歴史的な統合の仕方から予測されることではあるが，それに加えて，4拍以上の単語（複合語）になると型が一つにまとまるのではないか，とする松森（2011a, 2011b）の仮説も関わっている可能性がある。

5.6. 外来語とアルファベット頭文字語

すでに窪薗（2011）に，調べた外来語彙はすべてβ系列であったとの報告がある。ここも同じ池治方言で代用するが，私の調査結果も同じで，これまで得られたα系列のものは，

(17)　α:　[オル]ガ[ン（ガは[ga]），[アリ]バ[イ

のわずか2語だけである。他は，来歴が古そうなものでも，タ[バ]コ.，ト[タ]ン.，ブ[リ]キ.，[コッ]プ.　などβ系列である。

語音構造の点で興味を引くのは，β系列の特殊拍を含む（18）である。（すべて言い切り形で，本節ではピリオドなしで示す。パ行子音はすべて喉頭化音。）

(18)　β:　プ[ー]ル，ラ[イ]ト，サ[イ]ン，パ[ウ]ロ；
[パン]ツ，[ポッ]ト；
[ス]カ[ー]ト，[デ]ザ[イ]ン；
フ[ラン]ス，ベ[ラン]ダ，コ[ロッ]ケ；
[コ]ーン，[トロ]ン[ボ]ーン，[ジーン]ズ

ここでも，プ[ー]ル，ラ[イ]ト，[デ]ザ[イ]ンなどの規則的な－②型に対して，[パン]ツ，フ[ラン]ス，コ[ロッ]ケなど，先に述べた撥音（と促音）の特徴が出て－③型になっている。なお，[ジーン]ズはジ[ーン]ズではない。長音自体は核を担えるが，それは音節末に出る場合であって，その後にさらに弱い撥音が続くと，それまで面倒を見ながら一人で核を担う力はさすがになく，その前の音節主音にその役割を譲る（－④型）ものと解される。そのことが[コ]ーンに一層よく現れている。[コー]ンでないことは，「ーン」で一まとまりになって振る舞っていることを示す。これに助詞が付くと，[コーン]ガとなる。[トロ]ン[ボ]ーン，[トロ]ン[ボーン]ガも同じである。

アルファベット頭文字語は30語ほどしか聞いていないが，窪薗（2011）の報告と同じく，すべてβ系列を記録している。いくつかの例を（19）に示す。

(19)　β:　[zje:]'a[:]ru（JR），['e:bi]:[sji]:（ABC），['enuTi]:[Ti]:（NTT），[daburju]:[sji]:（WC）

6. 坂嶺方言

湾の北東，坂嶺（sa[N]mi）の方言に移る。話者は松田美枝子氏（大正15＝1926年生まれ）。話者の違いによるのか，窪薗（2011）の報告と若干異なる点があるが，特にその点を争点とするものではないので，以下は専ら私の記録したデータ

に基づいて論じていく。

6.1. 文節単位化

α系列は湾方言とまったく同じで，文節の次末拍のみが低くなる。β系列の2拍語も湾と同じで，違いは（20）のβ系列3拍語以上に出る。

(20)	β:	ha[Ta]na.（刀，包丁）	haTa[na]nga.	haTana[Ka]ra.	haTanaKa[ra]mu.
		haTa[na...	haTana[nga…	haTanaKa[ra...	haTanaKara[mu...
		[me]:[ra]bi.（娘＜女童）	[me]:ra[bi]nga.	[me]:rabi[Ka]ra.	[me]:rabiKa[ra]mu.
		[me]:ra[bi…	[me]:rabi[nga…	[me]:rabiKa[ra...	[me]:rabiKara[mu...

言い切り形では「文節次末拍」に，接続形では「文節末拍」に高まりが規則的にすべてずれることが分かる。接続形を中心に見れば「文節末拍」にずれるのが基本で，言い切り形は最終拍を下げる関係でその次末拍で止まっている状況である。

その意味で，窪薗（2011: 63）の指摘するように，坂嶺方言はα系列に合わせるかのように，β系列でも「単語」から「文節」へと音調付与のドメインが移行しており（しつつあり），両系列とも語声調的な特徴を持っていると言えそうに見える。

6.2. 単語単位の核

しかしながら，そう記述しただけでは不十分である。もしもβ系列も文節単位で，文節末が高まるとしたら，（21）のβ系列接続形はα系列と同じになることが期待される（言い切り形は区別）。

(21)	α:	[gu]du[ri（踊り）	[gudu]ri[nga	[guduri]Ka[ra
	β:	haTa[na...（刀）	haTana[nga…	haTanaKa[ra...
	α:	[tiN]To[:（空＜天道）	[tiNTo]:[nga	[tiNTo:]Ka[ra
	β:	[ti]Nzjo[:…（天井）	[ti]Nzjo:[nga…	[ti]Nzjo:Ka[ra...

しかし，これらは語頭寄りの音調の違いではっきり区別されている。また，（20）のβ系列の中でも系列化は成り立たず，haTa[na]nga.≠[me]:[ra]bi.，haTana[nga…≠[me]:ra[bi… などで，やはり語頭寄りの方の音調が違っている。

α系列は湾方言と同じ規則で決まる以上，この違いは，β系列がそれとは別の次の規則で決まることに拠る。これは同時に，系列化が成り立たないことの理由も説明できる。

すなわち，β系列は「単語」の段階でその次末位に「核」が指定されてその前の形状が決まり，その形状は核が文節末へずれても一定なのである。その決まり方は湾方言と同じで，核位置からみた直前拍のみが低くなる[15]。ha[Ta]na. のよう

[15] 窪薗（2011: 62）では，上昇する前の低音調の部分が2拍から3拍に及ぶことが珍しくないとして，次頁注7に，3拍名詞＋1拍助詞では「[○]○[○]が。」，4拍名詞＋1拍助詞では「[○

に単語レベルで核の前が1拍しかないものはそこが低いので，高まりのないまま haTanaKa[ra...，haTanaKara[mu… となる。その高まりの有無を含む形状特徴の違いで（21）の α/β は一貫して区別されている。

5拍語以上の β 系列でも同じ仕組みが働いている。

(22)	[taKa]ra[ba]Ku.	（宝箱）	[taKa]raba[Ku...	[taKa]rabaKu[mu...（～も）
	[sjimaKu]ni[pa]:.	（島みかん）	[sjimaKu]nipa[:..	[sjimaKu]nipa:[mu..
	[haNsu:]ju[mi]Ta.	（唐芋標準語）	[haNsu:]jumi[Ta...	[haNsu:]jumiTa[mu...

助詞類を付けて文節を長くするほど途中の低まり部分が長くなる関係にある。目的格の「をば」を付けると[haNsu:]jumiTaju[ba... とさらに延びる。昇り核（後半部の上昇）の位置が文節末へ後退しても，その前の下降は固定して動かないからである。対する α 系列は，「伸縮自在な鋳型」として働き，末尾の上昇が後退すると連動して前の下降も後退し，常に文節次末拍のみが凹むという形性を保持する。そういう違いが両系列の間にはある。

なお，単語レベルを離れてまで位置が移動する高まりも「核」と呼んだのは，単語単独言い切り形での「位置」が確たるものとしてあってその前部の形状を決めることと，その位置がずれても，言い切りと接続で一貫して区別があるからである。出発点としての核が，一部の環境を除いて位置が変化し，核としての性格が薄れかけている状態である。

6.3. 坂嶺方言のまとめ

結論として，坂嶺方言の β 系列は「単語単位の核」を保っている。その昇り核は，「単語言い切り形の次末拍」に与えられてその前の形状特徴を湾方言と同じ仕組みで決めた後，助詞付き言い切り形では「文節次末拍」に，すべての接続形において「文節末拍」まで移動するのである。言い切り形の末尾の下降がない分だけ，接続形の方が「上昇の遅れ」が一歩先に進んだものである（11.3 節も参照）。α 系列は文節単位で，湾方言と同じである。

7. 上嘉鉄方言

湾方言に似ていて（6）では同じグループに入れておいたが，助詞類のうちカラとマデの振る舞いが他と異なる上嘉鉄（ha[Ti]Tu）方言を取り上げる。話者は前島勇一郎氏（昭和 13 = 1938 年生まれ）。

7.1. α 系列に有核の助詞

上嘉鉄方言は，湾方言との関係が坂嶺方言とは違い，β 系列は全同で，（23）に

○]○[○]が。」のパターンは観察されなかったとする。これはそのとおりで，これらが出現しないのは本文に述べた理由による。

示すα系列の方が異なる。ここの主格助詞は，喜界島以外の琉球諸方言と同じくnu（の）である。

(23) α: mi[du（水）	[mi]du[nu	[mi]du[Ka]ra.	[mi]du[Kara]mu.
		[mi]du[Kara...	[mi]du[Karamu...
[ta]Ta[mi（畳）	[taTa]mi[nu	[taTa]mi[Ka]ra.	[taTa]mi[Kara]mu.
		[taTa]mi[Kara...	[taTa]mi[Karamu...
[midu]Ku[mi（水汲み）	[miduKu]mi[nu	[miduKu]mi[Ka]ra.	[miduKu]mi[Kara]mu.
		[miduKu]mi[Kara...	[miduKu]mi[Karamu...

α系列の/-[Kara(mu)/が湾方言の（8）と異なる。/-[madi(mu)/も同様で，これらの助詞の部分が核をもつ点が特徴である。「α系列名詞にカラ，マデが付いた文節」の次末拍に昇り核があり，さらに助詞が付いてもその核は動かない。あたかも, /midu[Kara/, /taTami[madi/という「文節」がβ系列の「単語」に相当する形になる。核であることは，言い切りと接続の区別があることで分かる。核より前の形状の決まり方もβ系列の単語と同じで，核を基点として直前拍のみが低まる。一方，β系列に付いた場合のカラとマデは湾方言と同じで，ha[TanaKa]ra., [mu]Cji[gumimadi... など，特別な振る舞いを見せない。

7.2. ドメインの問題か

窪薗（2011: 64–66）は，上嘉鉄方言のこの現象を，基本メロディーは湾方言と同じHLHで，ただしそれが付与させるドメインが文節全体ではなく，「名詞＋助詞の1拍目」であるとする。名詞語末にLを，助詞の1拍目にHを付与し，助詞の2拍目以降は音韻的に不可視であると分析する。

しかしながら，この分析では間違った予測をしてしまう例（24）がある。同じ2拍助詞でも，ニム（＜ニ＋ム）は通常通りただ接合するのである。dimu（でも）も同じである。複合助詞に限らない。jeN（で，手段）も同様に振る舞う。結局，カラ・マデの問題であって，ドメインの問題ではないと見る。

(24)　[midu]nji[mu（水にも），[taTami]di[mu（畳でも），[taTami]je[N（畳で）

7.3. カラ・マデの位置づけと課題

カラ・マデの助詞そのもののアクセントの扱いであるが，名詞部分の音調型から判断して/[Kara/, /[madi/という独立する付属語ではない（独立型ならα系列が[ta]Ta[miKa]ra.＝[ta]Ta[mi| [Ka]ra. 等のはず）。α系列に付いた形は湾方言の「ぐらい」のような支配型とできるが，β系列がそうはいかない。α系列名詞に付いて文節全体で次末核型を作り出し，β系列名詞では他の助詞類と同じになる以上，有核助詞で，無核（語声調）名詞には支配型として振る舞い，有核名詞に接合するとその文節内の名詞の昇り核に消されるという特殊な中間タイプを考えるしかない。ただし，

その文節に組み込まれながら無核名詞に対して自らの核を主張する現象，およびN型アクセントにおけるこのタイプの位置づけについてはなお考える必要がある。このタイプは上嘉鉄に限らず，次の荒木方言も含めて広く分布している（上野 2000: 53 注 2）[16]。有核型化（β 型化）の一つの過程として捉えるべきであろうが，これらの助詞のアクセントがどのようにしてできたのかも今後の課題である[17]。

8. 荒木方言

湾と上嘉鉄の間にある荒木（['a]ra[Ki）の方言を取り上げる。話者は作井才子氏（昭和 3 ＝ 1928 年生まれ）。

8.1. 荒木方言の特徴

α 系列に付くカラ・マデが昇り核をもつことは上嘉鉄方言と同じであるが，それに併せて，αβ 両系列で形状特徴及び核の両方の上昇が遅れるという特徴がある。(25)（26）を参照。マデはカラで代表させる。β 系列の 3 拍語以下は湾方言と同じなので割愛する。

(25)	α:	ja[ma	[ja]ma[nga（が）	ja[ma]nji[mu（にも）
		[ta]Ta[mi	ta[Ta]mi[nga	taTa[mi]nji[mu
		[ta]:[ra（俵）	[ta:]ra[nga	ta:[ra]nji[mu
		[tiN]To[:（空）	tiN[To]:[nga	tiN[To:]nji[mu
		mi[zu]Ku[mi	mizu[Ku]mi[nga	mizuKu[mi]nji[mu
	β:	[mu]Cji[gu]mi.	[mu]Cjigu[mi]nga.	[mu]Cjigu[minji]mu.
		[mu]Cjigu[mi…	[mu]Cjigu[minga…	[mu]Cjigu[minjimu...
		[ti]N[zjo]:.	[ti]Nzjo[:]nga.	[ti]Nzjo[:nji]mu.
		[ti]Nzjo[:...	[ti]Nzjo[:nga...	[ti]Nzjo[:njimu...
(26)	α:	[ja]ma[Ka]ra.（から）	[ja]maKa[ra]mu.（からも）	[ja]maKa[radi]mu.（からでも）
		[ja]maKa[ra...	[ja]maKa[ramu…	[ja]maKa[radimu…
		ta[Ta]mi[Ka]ra.	ta[Ta]mi Ka[ra]mu.	ta[Ta]mi Ka[radi]mu.
		ta[Ta]mi Ka[ra…	ta[Ta]mi Ka[ramu…	ta[Ta]mi Ka[radimu…
	β:	[mu]Cjigu[miKa]ra.	[mu]Cjigu[miKara]mu.	[mu]Cjigu[miKaradi]mu.
		[mu]Cjigu[miKara…	[mu]Cjigu[miKaramu…	[mu]Cjigu[miKaradimu…

[16] もっとも，そこには伊実久（いさねく）方言も上げておいたが，今回聞いた話者では違っていた。
[17] 上嘉鉄では複合語をほとんど調べておらず，他の集落でも部分的にしか行なっていないが，α 系列の前部要素をもつ複合語が多くの場合に β 系列で出て来る方言が複数知られており，それとの関連を考えるべきではないかという見通しを持っている。助詞というよりも，複合名詞の後部要素に準ずるものという見方である。いずれにしても今後の課題である。

8.2. 形状特徴としての上昇の遅れ

先に，形状特徴の最初の上昇に着目すると，3 拍単位までは湾方言と同じであるが，4 拍以上の長さで違いが出る。

まず，α 系列の文節では，湾方言では語頭にあった上昇点が前次末拍（後ろから 3 拍目）まで遅れている。つまり，基点の文節末拍が高く，その直前拍がやはり低くなっているが，他は原則として前次末拍だけを上げるという規則[18]に変わっている。文節末の 3 拍だけで中が凹む形を取って完了し，それより前は語頭まで低くなっているのである。ただし，前次末拍が重音節の後部要素の場合は，それを含む「音節」全体が高くなっている（[ta:]ra[nga, [tiN]To[:, tiN[To:]nji[mu で，ta[:]ra[nga, ti[N]To[: 等ではない）。一段階古い状態がここに反映されている。文節末は最初から語音を問わずモーラ単位であったのに対し，3 拍以上の文節頭は，高く始まっていたのが上昇の遅れを起こしたもので，その変化の過程で重音節内での上昇を避けた結果，音節単位になっている。

次に β 系列であるが，「単語単独言い切り形」の核の位置を基点にして，やはりその前次末拍だけを上げることでその形状が決まる。核位置を含めて前に 3 拍分しかない 4 拍語の（25）だけではその点が見えにくいので，5 拍語以上の例を（27）に示す。核位置の前の長さに応じて語頭から順次低くなっていることがはっきりする。

（27）　Ku[su]ri[ba]Ku.（薬箱），ju:[bi]N[ba]Ku.（郵便箱），haCjinga[Cu]'u[du]ri.（八月踊り），'unangu[sji]N[se]:.（女先生）

さて，（26）に戻って，α 系列にカラが付いた文節（さらに他の助詞が続いた形も）は核をもち，言い切り／接続の交替もあって，（25）α のニモとは区別されている。この場合も，「カラが付いた文節の言い切り形」の核の位置を基点に同じ原則でその前の形状が定まる。

つまり，「与えられた基点の前次末拍のみを上げる」という形状特徴の原則は α β とも同じで，その基点が α 系列（のカラ以外）の場合は文節末拍，有核系列の場合は（名詞本来の場合でもカラ付きの場合でもどちらも）昇り核の位置となっている。この基点そのものは上嘉鉄方言と（カラを除けば湾や坂嶺方言とも）同じである。ここでも，核の位置に基づいて決めた形状特徴は，その最初の段階で固定し，動くことがない。この点が，順次後ろに移動して形を変える α 系列（のカラ以外）と異なるところである。

[18] ただし個人差があって，一連の拙論の中で報告してきた夫君の久吉氏（同年の 1928 年生まれ）の方が早めに上がる傾向があり，mi[zuKu]mi[nga などを載せている。その上昇もなだらかで中間の高さに聞こえることもある。

8.3. 昇り核の実現としての上昇の遅れ

今度は，昇り核の実現としての上昇の動きに目を向ける。

まず，(25)（26）のβ系列では，4拍語以上において単語単独言い切り形の次末拍を元に，それ以外の場合に1モーラだけ後退している。そしてそこで固定し，それ以上ずれない。なお，3拍語以下では ha[Ta]na. に対して ha[Tana…，ha[Tana]nga.，ha[Tananga… など，移動が起こらない。（坂嶺方言では3拍語以上において文節末まで後退することと比較。）

次に，(26）のα系列にカラが付いた文節の核も，その言い切り以外でそこからやはり1モーラだけ後退する。

つまり，核に関しては，どちらの場合も言い切り形の位置から1モーラしか後退しない。

8.4. 荒木方言のまとめ

荒木方言の特徴は次のようになる。(a）α系列に付くカラ・マデが助詞の1拍目に核をもつ。(b）形状特徴は「基点から数えた前次末拍を上げる」ことで得られる。基点は，α系列（無核型）では文節末拍，有核型ではβ系列の単語単独ないしα系列のカラ・マデ付き文節の言い切り形において昇り核がある拍である。(c）その形状特徴を保ったまま，核の位置は出発点となる言い切り形以外において1モーラ後退する（11.4節も参照)。

9. 中里方言

湾と道一本隔てて隣接する中里（na[:]Tu）は，他の方言と大きく異なる特徴を持つ。α系列でも言い切りと接続の交替を見せるのである。「水。」と「水（を）…」，「子が。」と「子が…」などで異なり，しかもα，βともに接続形では半下降（!）が現れる[19]。語音面でも，湾の tu[ri（鳥)，[ha]ri（針）に対して，中里では tu[i，[ha]i で，語中の ri の r が落ちるという違いがある。また，湾の wu[Tu（夫)，[wu]na[ngu（女）に対して，声門閉鎖音の ’u[Tu，[’u]na[gu である。話者は倉本禎彦氏（昭和9＝1934年生まれ)。

[19] 2点注記したい。一つは個人差の問題で，中里集落の中には湾方言の影響を強く受けている人がいる。私の最初の調査でもそういうタイプに会っており，今はもっと増えている可能性がある（窪薗2011の話者もそのタイプの可能性がある)。しかし，その種の発音に対し倉本氏は中里方言のものではないと言下に否定される。氏は，中里の人にのみ中里のアクセントで話し，他所の人には湾のアクセントと使い分けるというし，その接続形は極めて組織的で母語話者ならではのものなので，中里方言を代表する話者と見て調査を継続している。

もう一つは，上野（1984b，1991）がこの半下降を正しく記録していなかったことで，その下降を上野（2000）などのように半下降に訂正しなければならない。松森（1991）はこの不備な私のデータと自らの観察に基づく論である。中里方言におけるこの半下降音調はいまだ認識されていないようで，木部ほか（2011）のデータ集にも出ていない。

9.1. 接続形の交替規則

(28) α:	[Ka.	Ka[nga.	[Ka]Ka[ra.	[KaKa]ra[mu.
	[Ka…	[Ka!nga…	[KaKa!ra...	[KaKara!mu...
	mi[du.	[mi]du[nga.	[midu]Ka[ra.	[miduKa]ra[mu.
	[mi!du…	[midu!nga…	[miduKa!ra.	[miduKara!mu…
	[ta]Ta[mi.	[taTa]mi[nga.	[taTami]Ka[ra.	[taTamiKa]ra[mu.
	[taTa!mi…	[taTami!nga…	[taTamiKa!ra…	[taTamiKara!mu…
	[midu]Ku[mi.	[miduKu]mi[nga.	[miduKumi]Ka[ra.	[miduKumiKa]ra[mu.
	[miduKu!mi…	[miduKumi!nga…	[miduKumiKa!ra…	[miduKumiKara!mu...
β:	[na]bi.	[nabi]nga.	[nabiKa]ra.	[nabiKara]mu.
	[nabi…	[nabinga…	[nabiKara...	[nabiKaramu…
	ha[Ta]na.	ha[Tana]nga.	ha[TanaKa]ra.	ha[TanaKara]mu.
	[ha!Tana…	[ha!Tananga…	[ha!TanaKara...	[ha!TanaKaramu...
	[mu]Cji[gu]mi	[mu]Cji[gumi]nga.	[mu]Cji[gumiKa]ra.	[mu]Cji[gumiKara]mu.
	[muCji!gumi…	[muCji!guminga…	[muCji!gumiKara…	[muCji!gumiKaramu...

言い切り形は湾方言と全く同じである。違いは接続形にある。湾方言はβ系列にのみ交替があり，昇り核で高くなった後，文節末拍を下げるか否かの区別であったのに対して，中里方言はα，βの両系列に交替があり，(29) の規則で言い切り形から共通に作り出している。語頭に上昇がある[Ka.（α), [na]bi.（とその助詞付き形，β）では, (29) の「言い切り形の語頭以外の上昇」がないためにこの交替は起きず，湾方言と同じになる。

(29)　接続形は，高く始めて，言い切り形の語頭以外の上昇([)をその位置で半下降（!）に変える。

この結果，α系列は文節末拍，β系列は単語の次末拍が半下降し，その位置で両者が区別されている。中里方言においては, 語声調かアクセント核かにこだわらず，表面上の音声パターンの HLH に一律に反応して接続形を作り出している（11.5 節参照)。

9.2. 複合名詞

中里方言でも複合語アクセント法則は成り立たない。上野 (2012a) にも示したし，5.5 節の池治方言からも推測できるが，別の例も含めて（30）に挙げる。なお,「島」は「郷里」をさし，複合語の前部要素では「在来の，地元（産）の」の意味で用いられる。

(30)	前部要素	後部要素	複合語
	sji[ma（島 α）	'u[Ta（唄 α）	[sji]ma['u]Ta（β）
		hu[su（唐辛子[20]α）	[sji]ma[hu]su（β）
		[ju]mi[Ta（言葉 α）	[sjima]ju[mi]Ta（β）
		to[:]hu（豆腐 β）	[sjima]to[:]hu（β）
		ba[na]na（バナナ β）	[sjima]ba[na]na（β）
		mi[Ka]N（みかん β）	[sjima]mi[Ka]N（β）
	['a]bu[ra/['a]N[ba	'a[sji（汗 α）	['abu]ra['a]sji（β），['aNba]'a[sji（α）
	（油，脂 α）	ha[bi（紙 α）	['aN]ba[ha]bi（β），['aNba]ha[bi（α）
		su[ba（蕎麦 α）	['abu]ra[su]ba（β）（油で炒めた蕎麦）
		[so]:[mi]N（素麺 β）	['aburaso]:[mi]N（β）
		Ku[su]i（薬 β）	['aNba]gu[su]i（β）

ここに示したように，前部要素がα系列であっても，複合語はβ系列になるものが非常に多い。他にも，-[bi]N（瓶），-['aN]ba（油），-gu[su]i（薬），-ba[Te]:（畑）は，調査をしたかぎり，前部要素に無関係にβ系列になる。なお，(30) の「油（脂）」(['a]bu[ra, ['a]N[ba 両形あり[21]）を前部要素に持つ複合語は，最初の調査ではすべてβ系列で出たが，再調査では一部α系列になったものがあり，不安定な側面もある。

9.3. 外来語

外来語は中里方言でもβ系列で取り入れている。今のところ，α系列のものは，池治方言と同じく[オル]ガ[ン（ガはここでも口音）と[アリ]バ[イだけである。

国名・都市名から，['a]me[ri]Ka（アメリカ），['ame]ri[Kac]Cju（アメリカ人）のように「～人」を表わす -cCju（-N で終わる場合は -Cju）という単語が派生できる[22]。(31) にいくつか例を出す。いずれも地名と同じくβ系列である。

(31)		
	do[i]Cu（ドイツ）	[do]i[Cuc]Cju
	ro[:]ma（ローマ）	[ro]:[mac]Cju
	['iN] do（インド）	['i]N[doc]Cju
	Pe[Ki] N（北京）	Pe[KiN]Cju

[20] 形は「胡椒」に対応する。「唐辛子」を「胡椒」という方言は，九州から沖縄にかけて広く分布し，中部・山陰の各一部などにもある（尚学図書編 1989: 885）。本論から離れるが，ポリワーノフの論著の村山七郎編訳（1976: 150）は，熊本のなぞなぞの訳として「大石良雄とかけて何と解く。胡椒と解く。その心は赤穂家老（赤いからい）。」とするが，この「胡椒」の日本語訳は「唐辛子」でないと，「赤穂家老」＝「赤う辛う」までは分かっても，結局理解できない人が多いのではなかろうか。同編訳には，他にも理解困難な訳が多々ある。

[21] なお，複合語の中の 'abura-/'aNba- は答えるままに記録し，それ以上の確認はしていない。

[22] 他に，最後の母音を延ばすと，陰で悪口を言うときの形になる。['ame]ri[Ka]:, ['ora]N[da]:, [hura]N[su]:, ['i]N[do]:, [do]i[Cu]:，他に[sji]na に対する sji[na]:, [cjo]:[se]N に対する[cjo:]se[nu]: がある（ただし，現実には['ame]ri[Ka]: 以外は稀）。長母音化による語形成法は他にもあり，アクセントのβ系列と連動している。ju[da（枝）と [hjiN]ju[da]:（木の枝）も参照。

’o[raN]da（オランダ）	[’ora]N[dac]Cju
hu[raN]su（フランス）	[hura]N[suc]Cju
[ro]N[do]N（ロンドン）	[ro]N[doN]Cju

do[i]Cu や ro[:]ma に対する[’iN]do，’o[raN]da，hu[raN]su の例から，核を担えない撥音の特殊性が分かる。また，Pe[KiN]Cjuや[ro]N[doN]Cju が，次末位から予想される[Pe]Ki[N]Cju, [roN]do[N]Cju ではないということは，核が完全に－③に移っていて，そこを基点にその前の形状が決まることを示す。

なお，アルファベット頭文字語の DDTは[di:di]:[Ti]: であるのに対して，T という文字の発音は[ti]: で, /T/と/t/ で異なっていた。池治方言（19）の NTT と同様，形態素の切れ目がなく，DDT で一つの単純語と捉えているものと解される。

10. 伊実久方言

北部の小野津に最も近くに位置しながら，アクセントは小野津とも中南部の他とも大きく異なる伊実久（いさねく）（[’i]sa[nI]Ku）の方言を取り上げる。話者は玉岡カツヱ氏（昭和 16 ＝ 1941 年生まれ）。

10.1. 交替現象のない体系

(32) α:	ja[ma	[ja]ma[nga	[ja]maKa[ra	[ja]manji[mu	[ja]mamadi[mu
	[mi]na[Tu	[mi]naTu[nga	[mi]naTuKa[ra	[mi]naTunji[mu	[mi]naTumadi[mu
	[ti]NTo[:	[ti]NTo:[nga	[ti]NTo:Ka[ra	[ti]NTo:nji[mu	[ti]NTo:madi[mu
β:	[’u]mi.（海）	[’u]minga.	[’u]miKa(])ra.	[’u]minji(])mu.	[’u]mimadi(])mu.
	[’u]mi...	[’u]minga...	[’u]miKara...	[’u]minjimu...	[’u]mimadimu...
	Fa[Te]:.（畑）	Fa[Te]:nga.	Fa[Te]:Ka(])ra.	Fa[Te]:nji(])mu.	Fa[Te]:madi(])mu.
	Fa[Te]:...	Fa[Te]:nga...	Fa[Te]:Kara...	Fa[Te]:njimu...	Fa[Te]:madimu...
	[ti]N[zjo]:.	[ti]N[zjo]:nga.	[ti]N[zjo]:Ka(])ra.	[ti]N[zjo]:nji(])mu.	[ti]N[zjo]:madi(])mu.
	[ti]N[zjo]:...	[ti]N[zjo]:nga...	[ti]N[zjo]:Kara...	[ti]N[zjo]:njimu...	[ti]N[zjo]:madimu...

（32）から，この方言の特徴は，中里方言とは反対に，言い切りと接続の明瞭な区別がβ系列にもないことであり（次節で再述），さらに，2 か所に山がある重起伏調の場合も含めて，それぞれの高まりは 1 拍だけで連続することがないことである。

そして，α系列は，文節末尾 2 拍間で上昇を確保した後，さらにその前があれば語頭のみが上がる。つまり，両端以外は凹むタイプの二山形である。以前の調査で別の話者から[ta]Karamu[N（宝物）, [Fa]nasjigu[i（話し声）等も得ている。β系列は，単語単位での次末拍（核）を基点に，同じ原則でその前は下がり，その前があれば語頭が上がる。やはり別の話者から[hu]miba[Ku]:（米箱）, [Fu]Cumuc[Cji]:（蓬餅）等も記録してある（なお，コに対応する hu とフに対応する Fu は区別される）。

すなわち，高い文節末拍（α）および単語次末位の核（β）という他方言と同じ基

点から，その直前拍を低くした後，飛んで語頭のみを上げているのが伊実久方言である。

10.2. 交替現象の萌芽

ところで，（32）はβ系列に言い切り／接続の交替がありそうに見えるが，これは2拍以上の助詞（連続）が付いた（つまり，核の位置から3拍以上離れている）ときに，言い切りのイントネーションが働いて文節末（同時に文末）が音声的に下がったものと考える。（32）では -madi(])mu と mu が下がることがあるように書いたが，実際は di から下がることも，また，-ma]di]mu と二度下がったり，下がる位置が判然としなかったりすることもあった（カラモも同様）。同じことがニモにも生じている。他方言のような，文節末の下降の有無による言い切り／接続の機能が確立する前の，音声的な萌芽段階に見える。

そうなると，ここから，言い切り／接続の別が生まれるもう一つの可能性が見えてくる。これまでは，核の上昇位置が固定したまま下降が順次遅れていき，最後に接続形で下降が消えて成立したものと考えていたが，それだけではなくて，先に文節末の方が下がる体制を用意しておいて，それに核の反映が連動して成立するという道もあると見られる。

11. N アクセント史素描

ここまで記述したデータから考えられるアクセント史の概要を描いてみる。

11.1. 概要

取り上げた諸方言が原則的に対応している以上，遡れる体系もα／βの二型体系となる（今，複合名詞とカラ・マデはひとまず除く）。出発点として考えられる音調型は，事実上，伊実久方言の状態である。これが中南部祖体系で，α系列は文節単位で型が決まるのに対してβ系列は単語の次末拍に核があり，この段階ですでに文節単位と単語単位の併存，語声調とアクセント核との併存状態であった。語頭隆起のなかった段階がその前に想定可能だが，やはり両タイプが併存していたと考える。その「前中南部（諸方言）祖体系」も次の（33）の最初の段階に書いておくが，以下の具体的な説明はその後の「中南部（諸方言）祖体系」から始め，最後に11.6節で「前中南部祖体系」に触れる。

以下，αは5拍文節（構造不問）で，βは4拍名詞，4拍名詞に1拍助詞が付いた文節（境界を「·」で示す），5拍名詞で例示し，区別がなくても統一的に「.」と「...」を付す。◎は，ここでは（移動前の元の）核のある次末拍を示す便宜的目印である（（2）の平山の記号とは無関係）。中間段階と推定形の * 印は適宜省く。

11.2. 祖体系から湾方言へ

(33)	前中南部祖体系	中南部祖体系（伊実久）	*X	湾
α:	*○○○○[○.	> [○]○○○[○.	> [○○]○○[○.	> [○○○]○[○.
	*○○○○[○...	> [○]○○○[○...	> [○○]○○[○...	> [○○○]○[○...
β:	*○○[◎]○.	> [○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.
	*○○[◎]○...	> [○]○[◎]○...	= [○]○[◎]○...	> [○]○[◎○ ...
	*○○[◎]○·○.	> [○]○[◎]○·○.	> [○]○[◎○]·○.	= [○]○[◎○]·○.
	*○○[◎]○·○...	> [○]○[◎]○·○...	> [○]○[◎○]·○...	> [○]○[◎○·○...
	*○○○[◎]○.	> [○]○○[◎]○.	> [○○]○[◎]○.	= [○○]○[◎]○.
	*○○○[◎]○...	> [○]○○[◎]○...	> [○○]○[◎]○...	> [○○]○[◎○ ...

2 列目の「中南部祖体系」から始めるが，その祖体系からαβとも可能な範囲で「下降の遅れ」を起こして生まれたのが湾方言である。「可能な範囲」とは，まず形状特徴としての（最初の）下降については，αでは文節末拍，βでは核のある拍のそれぞれの上昇が実現できるよう，その直前拍の前までであり，一方，核の後では，言い切り形の文節次末拍までである。接続形では，その下降はさらにずれてすべて消えた。このように，下降が可能な範囲で遅れたのに対して，核も含めて上昇は動かなかった変化が（33）である。

この湾方言の状態から，各方言へ（34）（35）（36）の変化が起こった。以下，中間に想定される段階を便宜的に＊だけで示す。以下の＊がすべて同じであることは意味しない。

11.3. 湾方言から坂嶺方言へ

(34)	湾	＊	坂嶺
α:	[○○○]○[○.	= [○○○]○[○.	= [○○○]○[○.
	[○○○]○[○...	= [○○○]○[○...	= [○○○]○[○...
β:	[○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.
	[○]○[◎○ ...	> [○]○◎[○...	= [○]○◎[○...
	[○]○[◎○]·○.	> [○]○◎[○]·○.	= [○]○◎[○]·○.
	[○]○[◎○·○...	> [○]○◎[○·○...	> [○]○◎○·[○...
	[○]○[◎○·○]○.	> [○]○◎[○·○]○.	> [○]○◎○·[○]○.
	[○]○[◎○·○○ ...	> [○]○◎[○·○○ ...	> [○]○◎○·○[○...
	[○○]○[◎]○.	= [○○]○[◎]○.	= [○○]○[◎]○.
	[○○]○[◎○ ...	> [○○]○◎[○...	= [○○]○◎[○...

βにおいて，単語言い切り形の次末核にあった上昇（[◎）が，それより前の形状特徴を固定したまま，可能な限り文節末までずれてできたのが坂嶺方言である。具体的には，言い切り形では下降のある文節次末拍まで，下降のない接続形では文節末拍までずれたものである。それをより分かりやすく示すために，4 拍名詞に 2 拍

助詞の付いた形も加えておいた（＊の後に，中間形の[○]○◎○･[○○ ... を置いても構わない）。ここでは省いたが，3 拍語でも○[◎○ ... > ○◎[○... の変化が起こっている。α には変化が起こっていない。

（34）を一言でまとめると，下降は不変で，上昇が可能な範囲で遅れた変化である。

11.4. 湾方言から荒木方言へ

(35)	湾	＊	荒木
α:	[○○○]○[○.	> ○[○○]○[○.	> ○○[○]○[○.
	[○○○]○[○...	> ○[○○]○[○...	> ○○[○]○[○...
β:	[○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.
	[○]○[◎○ ...	> [○]○◎[○...	= [○]○◎[○...
	[○]○[◎○]･○.	> [○]○◎[○]･○.	= [○]○◎[○]･○.
	[○]○[◎○･○...	> [○]○◎[○･○...	= [○]○◎[○･○...
	[○]○[◎○･○]○.	> [○]○◎[○･○]○.	= [○]○◎[○･○]○.
	[○]○[◎○･○○ ...	> [○]○◎[○･○○ ...	= [○]○◎[○･○○ ...
	[○○]○[◎]○.	> ○[○]○[◎]○.	= ○[○]○[◎]○.
	[○○]○[◎○ ...	> ○[○]○◎[○...	= ○[○]○◎[○...

荒木方言は，α と β の形状特徴としての上昇（[○）が元の下降の 1 拍分手前まで，核の上昇（[◎）が基点となる単独言い切り形以外で 1 モーラ分，それぞれ遅れてできた。下降の方は動いていない。坂嶺方言との対比のために（35）にも 2 拍助詞付き形を加えておく。

11.5. 湾方言から中里方言へ

(36)	湾	＊	中里
α:	[○○○]○[○.	= [○○○]○[○.	= [○○○]○[○.
	[○○○]○[○...	> [○○○○][[○ ...	> [○○○○ ! ○ ...
β:	[○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.	= [○]○[◎]○.
	[○]○[◎○ ...	> [○○][[◎○ ...	> [○○ ! ◎○ ...
	[○]○[◎○]･○.	= [○]○[◎○]･○.	= [○]○[◎○]･○.
	[○]○[◎○･○...	> [○○][[◎○･○...	> [○○ ! ◎○･○...
	[○○]○[◎]○.	= [○○]○[◎]○.	= [○○]○[◎]○.
	[○○]○[◎○ ...	> [○○○][[◎○ ...	> [○○○ ! ◎○ ...

中里方言で接続形において半下降音調が生ずる変化と捉えた

(37)　(-)○]○[○(-)　>　(-) ○○][[○ (-)　>　(-) ○○ ! ○ (-)

は，音声学的には次のように説明される。（中里の場合は，後ろに続く態勢である

接続形の一般傾向として）下降が遅れて次の拍に移り，その次の上昇も遅れかけて上昇調になった段階で下降と上昇調とが接触し，その相互作用の結果として半下降が生じたものと考える。半下降と言っても，通常の下降に比べて単に下降幅が少ないという問題ではない。それよりもむしろ，半下降後の拍（とその連続）には自然下降がないように聞こえ，調音の弱まり方も少ないという特徴を持つ。途中に上昇調を想定するのはそのためである。

中里方言の半下降の出現をこう解釈することは，松森（1991）の自律分節理論とは枠組みが異なり，かつ，そのデータは半下降を捉えていないものの（注 19 参照），この半下降が二山型から生じた（HLH > H!H）とする仮説（Bantu 諸語の研究で提唱された説）は受け入れることを意味する。これまで日本語で半下降をもつ方言を発見してきた中で，とりわけ二型アクセントでその近隣に二山型の方言が存在する，ないし，半下降系列が二山型系列と併存している，という事実がその背景にある。そして実際，いわゆる HLH 音調と半下降音調はその音声実現が驚くほど近い側面があり，時には揺れてどちらとも聞こえる方言もあるからである。ただし，私は「浮遊 L 音調」を設定せず，上述のように動的に，遅れた下降と上昇調が接触することによって生じたものと考える。

11.6. 前中南部祖体系から中南部祖体系へ

最後に（33）に戻って，「前中南部祖体系」から「中南部祖体系」への変化である語頭隆起は，β において昇り核による高まりと語頭を明瞭に発音する傾向とが呼応してリズム現象として生まれ，それが時をほぼ同じくして α の文節末の高まりにも呼応して起こったものであろう。類型的に見ても，重起伏調（二山型）は単一系列だけに出るのはむしろ稀である。そして，語頭隆起が起こるためには核の前に一般に 2 拍が必要であるため，4 拍以上の長さにおいて起こったものである（3 拍の○[◎]○は不変化）。

これが起こった段階では，核ないし文節末拍と語頭拍との距離は「不定」で間に低い音調が連続しえたが，その後，11.2 節に述べた下降の遅れが生じ，核ないし文節末拍の基点の直前拍だけが低い湾方言の段階に至ったものと考えられる。この段階で二つの山は「連動」することになった。重起伏調が 3 拍単位以上において 1 拍分の低まりを含むのは最も一般的なあり方である。ちなみに，湾方言だけのデータしかなければ，前中南部祖体系段階から核の直前拍の落ち込みによって伊実久段階を経ずに直接生じた可能性も残る（中世末期の京都方言を参照）が，伊実久方言があることにより否定される（Uwano 2012b）。

なお，前中南部祖体系段階の核は，過去の推定であるうえに卓立型なのでその性質を見極めるのは容易でないが，典型的ではないものの「昇り核」になっていたと見る方が自然であろう。その後，αβ に共通する形状特徴としての語頭隆起が起こっているからである。α の文節末拍の上昇と平行するのは，（35）の◎の拍への上昇であるが，下げ核ではこの上昇が説明できない（私が HL ではないと規定している

下げ核の場合はその後を下げる力をもっているだけなので，別途，上昇を引き起こす働きの存在が必要となる）。昇り核か，山梨県奈良田方言（上野 2011）のような（◎の直前の拍に設ける）上げ核が候補となるが，その後に中南部祖体系から変化した島内他方言から見て，昇り核が最もふさわしいと考える。

参　照　文　献

服部四郎（1959［1958］）「奄美群島の諸方言について――沖縄・先島諸方言との比較――」『日本語の系統』275–294．東京：岩波書店．（本書は 1959 年 1 月に刊行されており，1958 年 5 月稿の本論文を収録。論文の実際の刊行は 1959 年 4 月で九学会連合『人類科学』11: 77–99 である。本書に『人類科学』IX とあるのは XI のミス。岩波文庫版も同様。）

服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢（1959a）「奄美諸島の諸方言」九学会連合奄美大島共同調査委員会（編）『奄美（自然・文化・社会）』403–432．東京：日本学術振興会．（ちなみに，本書の扉には『奄美　自然と文化』論文編とある。）

服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢（1959b）「奄美諸島諸方言の言語年代学的調査」同上：434–464.

早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.

平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.

川上蓁（2000）「日本語アクセントのトーン性」『音声研究』4(3): 28–31.

木部暢子（2011）「喜界島方言の音韻」木部暢子ほか（2011）: 12–50.

木部暢子・窪薗晴夫・下地賀代子・ローレンス　ウエイン・松森晶子・竹田晃子（2011）『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：喜界島方言調査報告書』，国立国語研究所共同研究報告 11–10．東京：国立国語研究所.

金田一春彦（1975［初出 1960］）「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『日本の方言――アクセントの変遷とその実相――』129–159. 東京：教育出版株式会社．（小野津等を「早町」とするも「早町村（そうまちそん）」のミス。現喜界町は旧喜界町と早町村が 1956 年に合併。）

窪薗晴夫（2011）「喜界島南部・中部地域のアクセント」木部暢子ほか（2011）: 51–70.

ローレンス，ウエイン（2012）「宮古方言における鼻濁音について」『琉球の方言』36: 1–8.

松森晶子（1991）「喜界島のアクセント交替」『日本女子大学紀要　文学部』41: 123–138.

松森晶子（2011a）「喜界島祖語における 3 型アクセント体系の所属語彙――赤連と小野津との比較から――」『日本女子大学紀要　文学部』60: 87–106.

松森晶子（2011b）「数詞のアクセントを通してみた喜界島語彙の音韻特徴」木部暢子ほか（2011）: 121–137.

村山七郎（編訳）（1976）『E. D. ポリワーノフ「日本語研究」』東京：弘文堂.

﨑村弘文（1985）「喜界島方言のアクセント体系」『鹿児島大学文科報告』21(1): 81–92.

白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則（2011）「琉球語喜界島上嘉鉄方言の談話資料」大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集』3: 111–152．京都：総合地球環境学研究所.

尚学図書（編）（1989）『日本方言大辞典』，上巻．東京：小学館.

上村幸雄（1957）「奄美方言の一考察――喜界島阿伝方言の文法について――」『人類科学』9: 107–136.

上村幸雄（1959）「琉球諸方言における「1･2 音節名詞」のアクセントの概観」『ことばの研究』国立国語研究所論集 1: 121–140.

上野善道（1977）「日本語のアクセント」大野晋・柴田武（編）『岩波講座　日本語 5　音韻』281–321．東京：岩波書店.

上野善道（1984a）「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題 2　記述的研究篇』167-209．東京：明治書院.

上野善道（1984b）「アクセント研究法」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 2　方言研究法』229–273．東京：国書刊行会.

上野善道（1991）「アクセント研究のために」『国文学解釈と鑑賞』56(1): 54–60.

上野善道（1993）「喜界島方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』21: 41–160.

上野善道・西岡敏（1994）「喜界島方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』22: 161–312.
上野善道・西岡敏（1995a）「喜界島方言の動詞継続相のアクセント」『琉球の方言』（法政大学沖縄文化研究所）18・19 合併号：145–163.
上野善道（1995b）「喜界島方言の活用形と複合名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』23: 151–236.
上野善道（1997）「喜界島方言の活用形のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』25: 95–189.
Uwano, Zendo (1999) Classification of Japanese accent systems. In: Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium 'Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena, Tonogenesis, Typology, and Related Topics'*, 151-186. Tokyo: ILCAA.
上野善道（2000）「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42–54.
上野善道（2002a）「喜界島諸方言の付属語のアクセント」第 4 回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会（編）『世界に拓く沖縄研究』（沖縄大会）：290–298.　沖縄：第 4 回「沖縄研究国際シンポジウム」事務局.
上野善道（2002b）「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』26: 1–15.
上野善道（2003a）「喜界島方言の活用形のアクセント増補資料」『琉球の方言』27: 1–59.
Uwano, Zendo (2003b) Accentual differences in the Kikai-jima dialects of Japanese. In: Stefan Warchoł (ed.) *Proceedings of the Third International Congress of Dialectologists and Geolinguists, Volume II*, 381–390. Lublin: Maria Curie-Skłodowska University Press.
上野善道（2007）「方言のアクセント研究はどうなっているか」『国文学解釈と鑑賞』72(7): 39–46.
上野善道（2011）「上げ核の由来――奈良田アクセントの成立過程――」坂詰力治（編）『言語変化の分析と理論』614–599.　東京：おうふう.
上野善道（2012a）「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
Uwano, Zendo (2012b) Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua* 122: 1415–1440.

執筆者連絡先：
〒 190-8561 東京都立川市緑町 10-4
国立国語研究所 理論・構造研究系
uwano@ninjal.ac.jp

［受領日　2012 年 4 月 6 日
最終原稿受理日　2012 年 7 月 27 日］

Abstract

Accent in Some Kikai-jima Dialects of Ryukyuan with Particular Reference to Nouns in Central and Southern Dialects

Zendo Uwano

National Institute for Japanese Language and Linguistics

The accent systems of nouns and their mechanism are described in six dialects of central and southern Kikai-jima, an island in the Ryukyus. First, we are concerned with the Wan dialect, which has a two-pattern accent system, one pattern with word-tone on the bunsetsu unit, and one pattern with an ascending kernel on the penultimate mora of the word. Here we see coexistence of word-tone and accent kernel. It also has the peculiarity that a moraic nasal can bear a final high pitch of the word-tone, but not an ascending kernel. This fact shows a qualitative difference between word-tone and accent kernel. The relationship between the kernelless pattern and word-tone is also considered. Next, the accent systems of five dialects, Sakamine, Kami-katetsu, Araki, Nakazato and Isaneku are interpreted in relation to that of the Wan dialect. Finally, assuming that the Isaneku system is the proto-system of these dialects, their historical relationships are outlined.